

小沢一郎と

小泉純一郎を斬る



自民党を「飛び出した」男と
「ぶっ壊した」男の大きな違い



小池百合子
(衆議院議員)

「小沢さんは、やっぱり変わってない」

中東のドバイ出張中に飛び込んできた自民・民主の大連立話に、私は驚くとともに、妙に懐かしさを覚えざるをえなかった。ところが時差の関係もあり、数時間後には大連立話の頓挫と、小沢一郎氏の代表辞意表明のニュースが入ってくる。今度は頭が混乱した。ドバイと東京との間で情報収集に励むうちに、次の段階では辞意撤回との知らせが入った。ますますいつか見たドタバタ劇だと、懐かしさが深まった。マジヤヴである。

小沢氏の言動は、時に周囲の人間にさえ理解できないことがある。独裁的だとか、人付き合いが悪いだとかのイメージもある。

私流に解釈すれば、小沢氏は「孤を守る」人である。肝心

かつての小沢氏なら、謝罪という形で自らの行動を一々説明するようなことは絶対にしていない。自分が覚悟を持って決断したことに、周囲の人間はついてきて当然だと考えていた。それが通用しなかったことが不甲斐なかったに違いない。

振り返ってみれば、五五年体制が崩壊し、自民党が下野した一九九〇年代以降の日本政治の主役は、間違いなく小沢氏だった。その小沢氏から主役の座をかつぎらったのは二〇〇一年、小泉純一郎総理の誕生である。

私は十六年の政治家人生で、この両者と間近に接する機会に恵まれた。似ているようで、似ていない両者が類稀なる政治家であることは否定のしようがない。それにもかかわらず、現在、二人の評価には大きな差が生じている。

では、この二人を分けてしまったものは一体何なのか。そのことを、私の体験に照らして考えてみたい。

「二枚のカード」

一九九二年、細川護熙氏の日本新党結党に参加して政治家となった私は、約六年を小沢氏の下で過ごした。一九九四年十二月の新進党結党から、自由党を経て、二〇〇〇年に保守党に参加するまでだ。新進党では副幹事長や党首補佐役を務め、また自由党でも広報の仕事を通じて、小沢氏の一挙一動を見てきた。尊敬し、政治の師とも仰いできた。

だからこそ、確信を持って言えることがある。極論すれば、小沢氏の政治行動の基準は、わずか二枚のカードに集約

な時ほど、幹部とさえ連絡を絶つから、皆で大捜索劇が繰り広げられることとなる。どうやら今回もそうであったようだ。ある意味で、小沢氏の姿勢は一貫している。

辞任撤回会見のとき、小沢氏がにじませたという涙の意味は何だったか。世間では、大連立構想によって迷惑をかけた謝罪の涙だと受け止められているが、違う。

あれは「嘆きの涙」だ。

自民党と民主党の大連立というダイナミックでアクロバティックな政局ゲームをやるうとしているのに、どうしてその意義を党執行部は理解してくれないのか。民主党が政権に参画する絶好のチャンスなのに、それを見ず見す逃して君たちはどうするんだ——それを分かってももらえないことへの無念さの表れだろうと、私は受け止めた。

される、と。それは「政局カード」と「理念カード」である。具体的にいえば、「政局カード」とは持論である政権交代という錦の御旗を立てることであり、「理念カード」とは安全保障を中心にした政策構想である。

小沢氏という政治的駆け引きに長けているように見えるが、決してそんなことはない。むしろやり方はシンプルだ。

自民党を離党し、細川政権の樹立から今日まで、手の内のカードはこの二枚を駆使することに尽きる。ある時は「政局カード」を振りかざし、それが手詰まりになると見るや、今度は「理念カード」を切る。この繰り返しである。

そもそも小沢一郎という政治家は、自民党に留まっていれば、間違いなく総理総裁の座を射止めただろう。

政治家としての出自からして、小泉氏とは違う。田中角栄、金丸信、竹下登という実力者の寵愛を受け、田中派経世会という自民党の主流中の主流に位置してきた。八九年には四十七歳の若きで幹事長に就任し、党の実権を掌握していたといっても過言ではない。当時、厚生大臣だった小泉氏など、比肩しうる存在ではなかった。

しかし、小沢氏は総理総裁に就くことなく、自民党に見切りをつけて離党してしまふ。選挙制度改革を含む政治改革を実現するために、政権交代可能な二大政党制を目指す、という大義名分のもと新進党を結成した。

私は自分が政界入りしてから、「なぜ小沢さんは自民党を割ったのか。その原点は何だったのか？」と幾度も考えた。おそらくそれは、九一年に勃発した湾岸戦争をめぐる日本の

対応にあったのではないだろうか。

湾岸戦争では、日本政府はアメリカ軍を中心とする多国籍軍への協力を求められた。しかし、憲法上の問題で自衛隊を派遣できない日本は、代わりに合計百三十億ドルもの巨額の戦費を求めにに応じて負担したものの、国際社会からの評価は低かった。イラクに侵攻されたクウェートは戦争終結後に感謝決議の意見広告を米紙に出したが、そこに並んだ三十カ国の中に日本の名はなかった。

この時のトラウマが小沢氏の中に大きく居座り続けていることは間違いない。国際貢献には目に見える形での協力が必要であり、それは国連を中心としたものに他ならない、という信念なのだろう。

この体験が「理念カード」となり、今でも国連原理主義者として小沢氏を縛りつけている。

その思いは、今回のインド洋での日本の自衛隊による給油活動の継続をめぐるテロ特措法への対応を見ても変わらないう。防衛大臣だった私が「小沢さんのカレンダーは湾岸戦争当時と変わっていない」と言ったのも、そういう意味だ。

このように小沢民主党の安全保障政策は自民党のものと相反する。しかし小沢氏は「自衛隊の海外派遣は国連決議に基づくものに限る、という一点で福田総理と合意した」と語り、自民党との「大連立」に踏み切ろうとした。「理念カード」で一致をみたので「政局カード」を引っ込めたわけである。

自民党を倒すと言っていた張本人が、参院選で大勝利を収めながらも、なぜ自民党と手を握るのか。一般的には理解し

難い行動ではあるが、私には腑に落ちた。小沢氏のこれまでの政治行動を貫くセオリーに照らせば、きわめて当然のアクションなのである。

なぜ「連立」なのか

小沢氏が同じように二枚のカードを切る瞬間に居合わせたことがある。野党であった新進党党首時代の九七年暮れのことだ。

その当時、新進党は、自社連立の橋本政権下で行われた前年の衆院選で伸び悩み、政権交代への道が遠のいていた。

鳩山兄弟らによる新党・民主党と票を分け合った結果でもあった。そんな中、小沢氏は党首自ら、新進党を解党すると宣言したが、そのとき「国の安全保障政策について党内が一致しなければ、政党の体をなさない」と理屈つけた。例の「理念カード」である。

その一方で自民党には「政局カード」を切っていた。村山政権を引き継いだ橋本龍太郎総理と水面下で接触し、沖縄の在日米軍問題で自民・新進両党間で政策合意文書まで交わしていたという。その先には、新進党内の左派を切り捨てて、自民党との連立を目指す保連合を模索していたのは言うまでもない。だが、それも失敗に終わったことで、小沢氏は急速に党運営への意欲を失って、新進党を解体してしまう。

その結果、非自民勢力の結集を謳った新進党はわずか三年で四分五裂し、小沢氏は自由党を結成し、私もここに参加す

ことにもなった。

政界再編の荒波の中で生きてきた結果、自慢にはならないが、新党の立ち上げはお手のものだ。党名、綱領、政策、キヤッチフレーズに、党名ロゴ作りまで、三日もあればまとめる芸当さえ身に付けたが、もうたくさんである。

政治は人間的な営為だ

その後の小沢氏は遠くから見るとしかなかったが、自由党も手詰まり感があったのだろう、新進党の政権獲得を妨げたはずの民主党との合併に踏み切った。政権交代可能な二大政党制を目指すという「政局カード」の再登場だった。

合併した民主党の内情をみれば、横路孝弘氏のような旧社会党グループから西村眞悟氏のような自民党の右よりもっと右のタカ派まで、安全保障政策で一致が難しい寄り合い所帯であることは明らかだった。それこそ、「安全保障政策で一致しない政党は、政党とはいえない」と新進党を解党したはずの人が、北朝鮮政策で右往左往した七党一派による細川連立政権や新進党時代へと逆戻りしたただけだ。

もちろん小沢氏はそのことを承知した上で、いわば「理念カード」を懐に忍ばせたまま、政権交代を目指す「政局カード」に賭けたのだろう。

先に述べたように今回の大連立騒動、小沢氏の頭の中では、「理念カード」と「政局カード」が一致を見ているはずだ。安全保障政策で合意したから大連立なんだ、と。だが、

ることとした。「政党は安全保障政策で一枚岩でなければならぬ」という小沢説に私は同意できた。それが自由党を選んだ私の最大の理由だ。結党時に集まった仲間の安保護も、新進党時代と比べれば、一致点が多く見られた。

防衛省の山田洋行問題で名前が挙がった自衛隊出身の田村秀昭氏や元公明党の東祥三氏らも行動をとりにした。

九九年、小沢氏は小沢内閣との自自連立政権を誕生させるという「政局カード」を切る。この時、「税制改革」「国連平和維持活動への参加」「政治改革としての政府委員廃止・副大臣制度の導入」に関して政策合意を結び、小沢氏は安保政策でも自分の土俵に自民党を取り込んだかに見えた。

それでも、自民党はしたたかだ。公明党を連立にひっぱりこんで、いつの間にか自自公連立となる。翌二〇〇〇年に事態は急変した。降って湧いたような連立離脱騒動が持ち上がる。三党間の政策合意が十分に履行されないと、小沢氏はまたしても「理念カード」を切ったのだ。

私も正直言って、小沢氏と行動を共にするべきか悩んだ。しかし、ここで連立政権を離れて野党になれば、小沢氏の「理念カード」によって、政策の先鋭化路線に再び拍車がかかることは想像できる。一方で、経済企画庁の政務次官の仕事や中途半端に投げ出すことには躊躇した。

後ろ髪をひかれる思いで小沢氏と別れて保守党行きへのバスに乗った。少々心細くもあったが、実は「政局」と「理念」の二枚のカードに振りまわされることにも、ほとんど疲れていなかった。実際に体調を崩し、半年間で二度の開腹手術を受ける

それは小沢氏の頭の中での整理であって、多くの民主党議員も国民も合点がいかなかった。

政治とは極めて複雑で高度に人間的な営為である。「理念」と「政局」の二つのカードだけで、ひとりひとり考え方の違う人間の集団を束ねられるものではない。

「野党の党内人事には関心ない」

小沢氏とは政治行動を六年間共にしたが、その間、いくつか忘れ難いシーンがある。

一九九五年、新進党党首に就いた小沢氏だが、その前、私は党首選への出馬を盛んにけしかけた一人だった。沖縄での会合にともに出席した折、夜更けに泡盛を飲みながら党首選への出馬を促した。「小沢先生はこれまで舞台まわしの役ばかりで、陰の人物としての印象が強すぎることは残念だ。この際、堂々と表舞台に立って活躍してほしい」と、説得した。

その説得が功を奏したのか、小沢氏は党首選への立候補を決めたが、いざ選挙戦となると、国会議員の名が記されたリストに「○」「×」「△」の印をつけた票読みに熱中する姿に、「選挙のオザワ」の顔を見る思いだった。

このときの党首選は、党員党友だけでなく一般国民にも投票権が与えられた選挙だった。永田町だけでなく、全国で支持を広く集めなければならぬ。私は選挙参謀を買って出た手前、小沢氏の支持拡大のために、全国の陣営事務所宛に小

かく取り付けたアポイントも、理由をつけて取りやめた。

ホテルも、政党の幹事長なら、客人を迎え入れるためにスイートルームを使うことが多いが、あくまでも普通の部屋を希望された。つまり、旅先では誰とも会いたくない、という小沢氏の意思表示でもあった。事実、同行した夫人と共にツインの部屋にさっさと入ってしまった。

こちらも立つ瀬がない。トルコ財界のトップが招いて下さったレセプションにだけは何とか引きずり出したものの、それ以外の面会はほとんどシャットアウト。オスマントルコ時代の史跡であるモスクなどの観光には関心を示していたものの、現地での要人との接点はほとんどなかった。一体何のためにトルコに来たんだろう、と不思議に思ったものだ。一人でも多くの人と会ってほしいと思ったが、お節介りだったのだろうか……。

また、一時は市川雄一元公明党書記長とイチイチ・コンビとして細川政権、新進党を仕切っていたが、公明党との距離感について語ったことも忘れがたい。

「みんな、公明党に擦り寄ろうとするが、それは間違いだ。彼らのことを突き放せば、ついて来るんだよ。脅すことがコツなんだ」と。

「国連主義」は錦の御旗か

六年近く行動を共にし、いまでも政治の師だとの思いは変わらないが、では、私は小沢氏のもとをなぜ去ったのか。

沢氏名で「メッセージ」をファクシミリで送るなどした。

こうして盟友である羽田孜元総理を破って党首となった小沢氏は、党内人事に着手した。小沢氏から「小池先生には○のポストに就いてもらうから」と役職を提示された。それに対し、「野党の党内人事に、関心はございません」と返答すると、真意を計りかねたような不思議な表情をしていたことが忘れられない。

自由党が民主党と合併後、小沢氏に「どんな役職に就くのか」と記者が尋ねたところ、「まあ、野党だから役職に就いてもしょうがないだろう」との答え。覚えてはいないだろうが、私の答えと同じだった。私は心の中で苦笑した。これも小沢さんらしい、といえはらしい。

自由党時代には、私は党の広報戦略として「小沢一郎が永田町で嫌われるわけ」という逆説的なコピーを考えた。世論に媚びずに消費税一〇％など、直球を投げる率直な姿勢を訴えたかったのだ。永田町の世界では、信念や発言がぶれる政治家がいかに多いのか、ということを明白にしたい気持ちもあった。

小沢氏とは外遊を共にしたこともある。

エジプト・トルコを訪問したのは九五年のこと。当時、小沢氏は新進党幹事長だった。

最初の訪問国であるトルコでは、要人とのアポの取り付けに動いた。私の中東人脈を精一杯使って、何とか小沢氏を売り込もうと私なりに一生懸命努力したつもりだった。ところが小沢氏は、「会合の予定は入れるな」の一点張りで、せつ

政策上の問題では、三点ある。時期はさまざまだが、国旗・国歌法案と外国人参政権の法案をめぐる対応、そして安全保障上での国連中心主義に対する見解の相違が大きい。

私は国旗・国歌法には賛成、外国人参政権には否定的な立場で、自由党内の大勢も同じ見解だった。心情的には小沢氏も同意見だったと思う。しかし、公明の取り込みという政局的観点からか、党内議論とは別に、国旗・国歌法に反対、外国人参政権に賛成とした。「政局カード」を使ったのだ。先述した「公明党は脅せばよい」という言葉とは矛盾していた。

この大転換は、私にとって衝撃だった。この二つの問題は国家のあり方の背骨の部分である。日本という国家としてのあり方を問う主要な政策を政局の道具として使うことに違和感を覚えた。いったん芽生えた不信任感、次第に膨れ上がっていった。いま思えば、これが「小沢離れ」のきっかけだったかもしれない。小沢氏のカードの切り方は、ただシンプルなかみではなく、ご都合主義ではないかとの疑念がよぎったのである。私は「それが政治さ」とは割り切れずにいた。

そして、小沢氏の国連原理主義に対しても、じつは私は懐疑的だった。著書『日本改造計画』で、日本の国際貢献は国連の旗の下に行うべし、武力の海外派遣においても国連軍を中心に言うべし、と書いている。この「理念カード」だけは小沢氏の中で一貫していたし、今もそうだ。

しかし、国連はそれほど立派なものなのか。国連憲章に則って現代の国際社会を読み直せば、それは欺瞞に満ちた構図

しか見えてこない。いまや日本の国連予算における分担金の割合はアメリカに次ぐ世界第二位にもかかわらず、国連憲章にはいまだに敵国条項が残っている。つまり、第二次大戦での敗戦国である日本の地位は、国連のなかにおいてはいまだに回復されていない。ユナイテッド・ネーションズという名称からして、第二次大戦の連合国側という意である。

その国連での決議が、果して錦の御旗になるのだろうか、という疑問も残る。国連とは、加盟する各国が一定のルールの下に、厳しい国際ゲームを戦っている場である。日本は独立した主権国家である。主権国家たるもの自主独立の精神を貫くべきで、自国の存立にかかわる判断基準を国連という外部組織に求めるべきではないだろう。

かりに国連決議を尊重したとしても、憲法上の問題もあり、現在の日本では取りうる行動には自ずと制限がある。まさに湾岸戦争当時の小切手外交の悪夢を繰り返すことになりかねないのだ。アフガニスタン問題において小沢氏が提唱する、より困難を伴う陸上での活動参加は、その言やヨシではあるが、インド洋上での給油活動よりは、さらに国内での問題を複雑にするだけであり、実現の可能性はさらに遠ざかる。そのことを、小沢氏は誰よりも理解しているはずだ。

よしんば国連原理主義でいくなら、それに合わせて憲法改正をも行わなくては、実際に現場に赴く人々を危険に晒すことになる。防衛「省」昇格とともに、国際協力活動が本来任務に加わった自衛隊を機能的、かつ安全に動かそうにも、憲

らこそ、私は小沢氏を師と仰いだ。だが、その小沢氏が今や弱者への配慮を唱え、「共生」と「セーフティネットの確立」をキャッチフレーズにしている。

皮肉なことに、小沢氏が『日本改造計画』で主張していた政策を履行し、「自民党をぶっ壊す」ことを成し遂げたのは、当時、小沢氏が歯牙にもかけなかった「変人」小泉純一郎である。

小沢氏と小泉氏の共通点と相違点を確認することは、政治とは何か、政治家の資質とは何かを考える点でいいレッスンになる。

二人とも政治に「ダイナミックさ」を求める点は共通している。小沢氏は自民党を割り、野党連立政権を作った。小泉氏は「九・一一郵政選挙」で、誰も予想しなかったまさかの解散総選挙を実現し、自民党に大勝をもたらした。

卒業生エッセイ

創立1921年

文化学院

西村八知
(前校長・画家)



「、ぼくの子供の時代は、たゞなんともなく生きてきた。たゞ犬のように生きてきた。ぼくはほんやりして学校の勉強が嫌いな子であった。絵が好きなので文化学院に入った。美術部の先生には画家の船伊之助先生や美術評論家の今泉篤男先生が居て、両先生ともが不思議にぼくの絵をほめてくれた。そのほめ方が巧いとか、煽てるようないい方ではなくて、ぼくの作品の質に、上質なものがあるといつてくれたのでうれしかった。そんな所に目を付けてくれた人が、ぼくの尊敬していた人なので尚更うれしかった。ぼくみたいな頭のそう良くない人間でも良いところを見付けてくれる先生がいる。文化学院はそんな学校であった。そこでいろんなことを知り、そしてぼくはどうかやら少し上質な人間らしくなり、たゞ生きてくらす犬のような生き方ではなくなってきた。

(次回に続く)

〒101-0065 東京都千代田区西神田2-9-15 (飯枚)

JR・水道橋駅 下車徒歩3分

☎03(3294)7551
bunka.gakuin.ac.jp

法の壁が立ちはだかっている。だからこそ、安倍晋三前総理は在任中に「安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会」(安保法制懇)を立ち上げていたではないか。

国連外交のトラウマを最も受けているはずの小沢氏が、なぜ国連中心主義の幻想に固執し続けるのか。ましてや、できるはずのない国連軍の創設をずっと謳い続けて行く理由が正直理解できない。これも、「政局カード」の一種で、手裏剣のように投げつけているだけなのだろうか。

明と暗

「小沢一郎は現代のマルクスだ」

と評した人がいる。その真意は、「政治家たるもの、若き日に一度は必ずかぶれる」言いえて妙である。

かくいう私もその一人である。今も民主党内には小沢チルドレンと呼ばれる人たちがいる。若い議員にとって小沢氏のシンプルさは魅力だ。政局と理念の二枚のカードをスパッスバツと切りまくるのも、むしろ好ましく見える。

『日本改造計画』の中に有名なエピソードがある。米国のグランドキャニオンの展望台には柵がない、と紹介し、小沢氏は米国は自己責任の国、日本もこれからは自立した個人が自己責任で生きる国にならなければならないと唱えた。

これは、何ごともお上にまかせて護送船団方式でやってきた当時の日本の問題点を、見事に剔抉したものである。だから小泉氏に対して、小沢氏はひたすら内向きのエネルギーが充満する。

優勝した大相撲の横綱・貴乃花に対して「痛みを耐えてよく頑張った! 感動した!」と言いつつ放ったように、小泉氏の言葉の運び方や発し方の切れ味は抜群に優れている。これは天性のものとしか評しようがない。

私は小泉氏に環境大臣として抜擢されたわけだが、実はそれまで個人的に話をする機会はずっとほとんどなかった。閣議や閣僚懇談会といった公の場を別にすれば、閣僚全員による会食で席を同じくしたくらいだ。一時、私が小泉総理のために手作りのお弁当を持参したなどと書きたてたマスコミ報道があったが、根も葉もないばかりかばかしい噂話にすぎない。

小泉氏が二〇〇一年の総裁選に出馬する前、一度だけ食事をもとにしたことがある。同僚議員に誘われて、私の友人と四人で小泉氏行きつけの小料理屋で宴が始まった。プライベートの場で小泉氏がどんな話をするのか興味があったのだが、始めから終わりまでシモネタのオンパレードだった。趣

味のオペラや映画の話でもするのかと思っただが、一切なし。ただただ、小泉氏の「座談力」に圧倒されるばかりだった。ただ、そんな話の合間に一つだけ、「あなたの委員会での質問は的確で大したものだ。参考になることが多い」とお褒めの言葉を頂戴した。その時だけは、「あつ、ちゃんと見てくれていたんだな」と嬉しく思ったものだ。

一方、小沢氏の場合、議論の場向き合っている、なかなか胸襟を開いてくれることはない。

人見知りなのだろうが、話をするにしても、教え諭すかのような場合が多い。「そんなことも、わからんのか」と返ってきてそうで、どうも会話が続かなくなってしまふ。記者に対する扱いも似たようなものである。先の民主党代表の辞任撤回会見では「東北出身者である私は口下手で……」と仰っていたが、知り合いの東北出身者が「一緒にしてほしくない」と言っていた。

政治家はやはり「暗」より「明」の方が向いている。

「孤」を守る小沢氏と「群れない」小泉氏。子分を作るがいつしか離れていく小沢氏と、最初から作らない小泉氏。似ているようで決定的に違うのは、「明」と「暗」の差であろう。

第二は「旧来の自民党的慣習」への執着だ。

小沢氏の対政治家観の根底にあるのは当選回数至上主義だと感じたことがある。かつて非自民連立政権時代に、さきがけ代表だった武村正義氏との確執が囁かれた。新聞・雑誌などのメディアも盛んに書きたてたが、当時、小沢氏がふと漏らしたフレーズは今も忘れられない。

ように、要所要所での勝負所では抜群の政局観を發揮し、結果、五年五月という長期政権を守りきった。総理が総裁任期満了で退任するのは、中曽根元総理以来、実に十九年ぶりのことである。

そして最後の違いは、自民党という政党の利用の仕方だ。結論からいえば、自民党を外側から壊そうとしたのが小沢氏で、反対に内側から壊したのが小泉氏だ。成功したのは、言うまでもなく小泉氏だった。

政治とは日本という国家の舵取りをすることであり、政党はその実現に向けた「機能体(ゲゼルシャフト)」である。政党の継続、発展はあくまでも、その機能を円滑にさせるための副次的要素でしかない。日本という国家がうまくいくことが「目的」である。政党はあくまでもその「手段」でしかない。

かくいう私も政党はあくまで機能体であり、「運命共同体(ゲマインシャフト)」では決まれないというのが持論である。政党再編の荒波を泳ぐ羽目になったため、政界渡り鳥などと揶揄されることもあるが、自民党を出発点にいくつもの政党を経験した議員は数多い。

その意味で、小沢氏が自民党から大勢の兵を引連れて離党し、自民党の一元支配に風穴を開けたことは、日本という国家の成長のために間違った選択ではなかった。

しかし、結果として「政局カード」と「理念カード」の使い分けによる小沢氏の政治運営は、多くの同志を失うことにもなり、彼らの大半は自民党へ戻ったのである。

「アイツはまだ当選三回なんだろ」

従来の自民党的慣習にしたがえば、大臣就任の適齢期は最低でも当選五回、それ以下の代議士はいうなれば小僧っ子扱いだった。初当選したら党内の部会で勉強を重ね、省庁の政務次官を経験する一方で、党務でも汗をかき、それを繰り返しながら選挙を二回、三回……と勝ち抜いて初めて、大臣の椅子に手が届くようになる。こういったヒエラルキーが厳然と存在していた。

ところが、連立与党の中のキーマンといわれた武村氏は官房長官から大蔵大臣を歴任するという、異例のスピードで政権中枢に急接近してきた。だが、自民党幹事長を経験した小沢氏は当時、当選九回。そのキャリアに裏打ちされた価値観こそが先のセリフを言わせたのだろう。

一方の小泉氏は、総理在任五年半の粗闊人事を見ても明らかのように、因習や当選回数にこだわりのない。派閥の推薦名簿も一切受け付けず、総理としての判断で次々と一本釣りで若手を閣僚として起用していったことは記憶に新しい。

第三は、意外かもしれないが「政局」対応である。

小沢氏の切り札は「政局カード」だと先に申し上げたが、実はそのカードの釣果は多くない。勝利したのは最初の細川政権くらいで、それも短命政権に終わってしまった。対して小泉氏は、自民党総裁選で二度の敗北はあるものの、総理就任を決めた三度目の総裁選では組織票を固めたときれていた橋本元総理と戦い、地すべりの勝利を取めた。また、総理就任後でも、郵政選挙における三百議席の圧勝に代表される

小沢氏の計算違いは、政党と派閥の使い分けである。派閥は運命共同体そのものである。小沢氏は「機能体」である政党を「運命共同体」である派閥と勘違いしたのではないだろうか。もっとも、自民党においてすら、すでに運命共同体としての派閥は存在意義を大きく変えつつある。ところが、小沢氏は運命共同体の親分として、みんなオレの言うとおりにやればいいんだ、と考えたのではないか。その意味で小沢氏は典型的な派閥政治家である。小沢氏が育った田中派の有名な言葉がある。「一致団結箱弁当」。これほど運命共同体である派閥というものを象徴する言葉はない。

しかし政党は機能体であって運命共同体ではない。そのことが小沢氏の頭の中でごっちゃまぜになっている。だから、この大連立劇でも、自分が福田総理と差して話をつければあとは、皆がついて来ると思っていた。たしかに昔ならそうであったろうが、もはや現実とは違った。

一方、それに対して、「自民党をぶっ壊す」と宣言して総理になった小泉氏が壊したのは、じつは自民党という機能体ではなく、経世会を中心とする派閥だったのは卓見だといえる。小泉氏は意識してか知らずか、機能体と運命共同体の違いをたくみに踏まえていたのではないだろうか。

ねじれ解消に、第三の道

これからの時代、日本を取り巻く政治環境はまったく楽観視できない。国際情勢をみれば、テロとの戦いは依然として

終結していない。一バレル百ドルをうかがうような原油価格の高騰に加え、地球温暖化対策を含めた環境対策も世界的に喫緊の課題である。こういった問題に日本が主導権を発揮するためにも、政治的空白は一刻も許されない。

それだけに、衆参のねじれ解消は急務である。そのため、衆参のねじれ解消は一刻も許されない。

そのための解決策は、じつは二つしかない。

一つは衆院選で民主党が過半数を握ることでの完全な政権交代である。

しかし、東アジア情勢が不透明な状況下で、安全保障政策さえ定まらない政党に、日本を託すことはできない。それこそ、「安全保障政策で一致しない政党は、政党とはいえない」。テロ特措法の延長問題にはじまった今回の一連のテロ対策問題でも、民主党は与党案への対案さえ出せない状態だ。民主党の対応を見れば、責任ある与党になるには時期尚早である。

事実、そのことを代表である小沢氏自身が今回の連立騒動で認めてしまった。能力ある民主党議員もいるはずだが、代表にもかかわらず明快にダメだしされてしまったのは、さすがに彼らも立つ瀬がないし、気の毒なくらいだ。

国民の間では、大変革を求める思いがあることも感じる。だからこそ、しがらみのない新党をスタートに、外側から自民党に体当たりをし、小泉氏という稀有なリーダーを得て、自民党という日本そのものの組織を内側から改革しようとしてきた私である。自民党は、先の参院選で農村票で負けたからと、地方重視の政策に先祖返りを図ろうとしているが、次

の総選挙を決するのは議席数の多い都市部である。改革継続への国民の声を聞かずして、野党の一週遅れの政策に重点を置いていようでは、勝利へのイメージがわからない。

二つ目が、大なり小なり、いずれかの形で連立政権を築くことである。だが、果たしてそれでいいのか。

私は第三の道もあると思っている。

政界再編である。そのキーマンは、おそらく小泉氏と小沢氏になるだろう。「明」と「暗」の両者による新たな舞台が幕を開ける。

いずれにしても遠からぬ将来、衆院選で自民党と民主党は雌雄を決することになる。

夏の参院選の敗北直後、小泉氏は「自民党はこの大敗に耐えられるか、民主党はこの大勝に耐えられるか」と発言している。まるで今回の連立騒動を予期していたかのような言葉だ。

その小泉氏は大連立構想が明らかになった段階で、「連立構想も結構だ」と発言した。その延長線上にはおそらく政界再編を意識しているのではないか。自民党も民主党も理念が違うものが混在している。機能体としての政党を活性化するためには、その是正が必要だ。ポスト安倍の総裁選のとき、「小泉カムバック・コール」が自民党内だけでなく、国民の間からも巻き起こった。私もその一人である。小泉氏は総理再登板の可能性を否定しているが、政界再編の大義名分があればどうなるかは分からない。

さて、そのとき小沢氏はどう出るだろうか。

真珠湾攻撃 総隊長の回想

重ノ解説 中田整一

淵田美津雄(ふちた・みつお)
1902年(明治35年)奈良県生まれ
24年(大正13年)海軍兵学校卒業(52期)
44年(昭和19年)大佐任官
51年洗礼を受ける
76年死去

66年目の初公開!

真珠湾、ミッドウエー、
広島・長崎を自撃し、
ミズーリ号の降伏調印
式に立ち会った男は戦
後なぜ、キリスト教に
回心したのか?

保阪正康氏絶賛——
歴史の真実と個人の煩悶と
を正直に明かした異色の回
想記。史実の書き換えを迫
る貴重な書である。

定価1,665円
978-4-06-214402-5

赤い謀報員

ゾルゲ、尾崎秀美、そしてスメドレー

太田尚樹

定価2,100円 978-4-06-214382-2

二十世紀前半、日本と中国で激動の時代を駆け抜けた男女が命を懸けたものとは?

世界に名を轟かせたスパイ、リヒャルト・ゾルゲとエリート知識人尾崎秀美、二人を結びつけたアグネス・スメドレー。謀略の世界で闘ったこの三人の出会いと別離、そして死までの真相に迫った渾身のドキュメント。

※定価はすべて税込です。 講談社 〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

介護者のための救命・救急手当の決定版

高齢者介護 完全図解 急変時対応 マニュアル

緊急事態が発生した時に適切な対応と行動とは!? 介護事故予防にも役立つ! ベストセラー『完全図解 新しい介護』実用介護事典に続く 待望の第3弾!

定価3,990円

978-4-06-232416-3

【判型・体裁】A5判、本文352ページ
2色刷り、上製・厚紙表紙・カバー掛け

監修 北一第一 美濃良夫(編著) 大田仁史・三好春樹(監修)